

今回は、最近、共同研究者の方々からフォーラムに寄贈していただいた書籍の紹介です。

『教師になること、教師であり続けること—困難の中の希望』

＜グループ・ディダクティカ 編＞
(2012年9月発行:勁草書房 2600円+税)

共同研究者・山崎雄介さん(群馬大学大学院教育学研究科教授)からの寄贈。14人の大学と現場の先生方の共著です。表紙の帯に惹かれます。

「この閉塞状況をどう突破するか。『教師になる』『教師である』ことにまつわる困難・葛藤とは何か。数々の制約のなか、いかに『希望』を見出していくのか—。悩める現場教師・教員志望者にひとすじの光明をもたらす一冊。」

第Ⅰ部「教師の困難はどこから来るのか」、第Ⅱ部「この世界で教師として学ぶ」、第Ⅲ部「閉塞状況をどう突破するか」の三部構成。山崎雄介さんは、まえがきと第1章を執筆されていますが、痛いほどに先生の問題意識と鋭い現状分析が伝わってきます。

上からと世間からの「教師バッシング」の中で、教師たちの苦悩に寄り添い、苦悩の背景と根源に迫りながら、「困難の中に希望はあるか」と問題提起。その答えを、あくまで現場の教師たちの営みと実践に見出そうとしています。

では、どのような希望が語られているのでしょうか。会員みなさん、現場の先生方と共に読み解いていきたいものです。

『季刊 戦争責任研究(第76号、2012年夏季号)』

＜日本の戦争責任資料センター 発行＞
共同研究者・岩根承成さん(元群馬大学・前橋国際大学講師)からの寄贈。



この第76号は、特集に「靖国神社問題」を組んで、4つの論文を掲載しています。その中に、岩根承成さんと確井哲郎さん(国際協力機構ミャンマー派遣専門家)共同の「ビルマ・カラゴン村事件とその取り組み」があります。

カラゴン村事件とは、アジア・太平洋戦争末期の1945年(昭和21年)7月上旬、群馬県高崎兵営を補充隊とする、第33師団歩兵第215連隊第3大隊による、ビルマ(現ミャンマー)東南部カラゴン村における住民虐殺事件です。被害者は、女性、子どもを含む少なくとも600人以上が虐殺され、若い女性住民10人余と幼児数名が拉致され、その後、村が焼き払われた事件で、戦後、イギリスによるいわゆるBC級戦犯裁判にかけられました。

岩根さんは、『イギリスの対日戦犯裁判記録』に基づいて、事件の概要を追い、詳しく分析しています。そして事件の舞台となったカラゴン村で現地調査と村人からの聞き取りを行ない生々しい証言で事件の真相を説明しています。さらに、戦後復員した元日本兵は、どのようにこの事件をとらえてきたのだろうか、彼らの胸のうちに迫る努力をします。「誰も思い出したくないし、蒸し返したくないという雰囲気が常にあった」という元215連隊関係者。「元兵士たちは口を揃えるように『命令は絶対だ』と断言する。その命令に従い村人たちを殺害した事実を、彼らは戦後ずっと自分の心の奥底に封印して生きることを強いられてきたのだろう。」と岩根さんは述べています。

特筆すべきは最後の章。カラゴン村は戦後 60 年経っても変わらない貧しい暮らしぶり、多くの児童は教育の機会がありません。こうした現実を前に、被害者のカラゴン村の人々と加害者の元日本兵、そして側にいた英兵たちの三者が、戦後 65 年目にして向き合うことになりました。和解の形を作る取り組みが始まり、募金活動が始まって約 2 年後小学校が完成しました。「これは日本人と私たちが一緒に作った小学校、こんなに嬉しいことは生きていて今までなかった」と笑みを浮かべる年配の女性。…「国家が始めた戦争に巻き込まれた人々の長かった戦後の悲しみだけの歴史が終わり、新しい何かやとこれから始まるのではないか。」と岩根さんは結んでいます。

いくさ ゆ はえぼる
『 戦世の南風原

—語る のこす つなぐ— 』

南風原町史第 9 巻 戦争編本編

＜南風原町史編集委員会 編＞

(2013 年 3 月発行：沖縄県南風原町、非売)

共同研究者の菊池実さん（群馬県埋蔵文化事業団）を通じて、南風原町から寄贈していただきました。

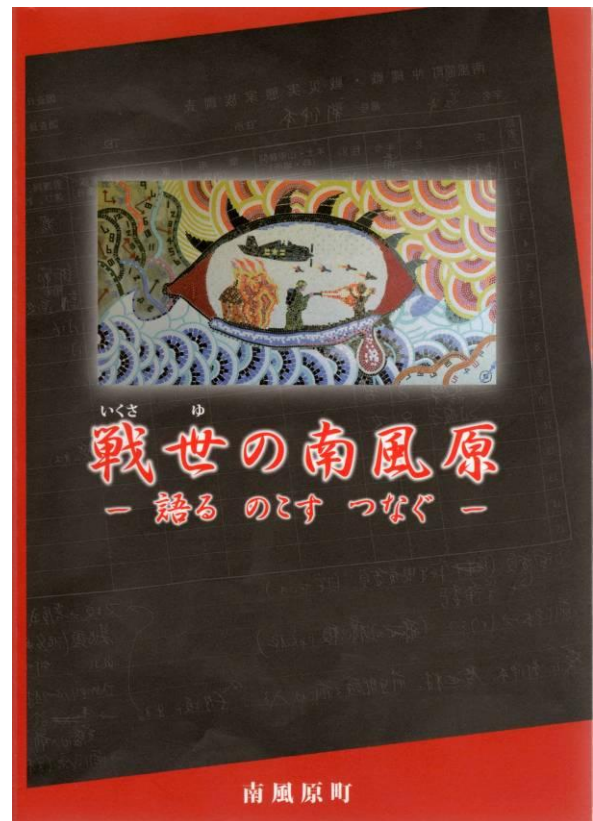
第 I 章・南風原の沖縄戦、第 II 章・モノからみる南風原の沖縄戦、第 III 章・証言にみる南風原の沖縄戦の三部構成。

南風原町は、沖縄陸軍病院南風原壕のあった町。町として沖縄戦を記録する取り組みには並々ならぬものがあります。県内でも早い時期に、「南風原方式」と称される字別の悉皆調査と記録の刊行。国に先立って、沖縄陸軍病院南風原壕の町文化財指定・整備公開・南風原文化センターの展示と、先駆的でした。本書は、こうした南風原町の沖縄戦を記録する取り組みの総決算として編集されたものです。

「さらに、18 人の執筆者数と執筆者の多

くに 20 代、30 代を起用した事も大きな特徴である。…『継承の視点』を大事にし、町史編集事業にも繋いでいくことにした」（編集委員長 吉浜忍氏）ということです。

沖縄県民の深い傷を逆撫でするような今の政治状況…私（瀧口）は、「慰安所跡」と住民の証言に、改めて胸が痛みました。



この貴重な町史に菊池実さんも執筆されているご縁で、当フォーラムに寄贈されました。菊池実さんは「飛行第 244 戦隊 新垣安雄少尉」を執筆しています。南風原出身の新垣安雄少尉は、1945 年 2 月 16 日の館林市付近の空戦で撃墜されました。炎上した機体と遺骨は、1979 年に発掘されるまで地中深く埋もれていました。新垣少尉の写真、館林市常楽寺の慰霊碑、発掘の様子、南風原文化センター所蔵の遺品等が紹介されています。それらにまつわるエピソードも含めて、菊池実さんお得意の徹底した研究調査の成果が、一人の若者のドラマを再現してくれます。

(文責：瀧口典子)